

開放政策下の流行り謡の特徴

岡 益 巳

1. はじめに

岡[1995]では、「流行り謡」＝「政治や社会を風刺した謡」を切り口として、開放政策下の中国社会で顕在化してきた諸問題を指摘した。しかし、①開放政策下の流行り謡を取り巻く政治的環境の特質、②流行り謡に託した民衆の本音の所在については十分に言及できなかったきらいがある。

本論では、開放政策下の流行り謡を取り巻く政治的環境の特質に関して、古代から文革に至る時期の流行り謡の採集形態、特に、五・四運動期及び毛沢東政権下の採集形態と比較し、明らかにする。中国は先秦以来今日に至るまで一貫して封建的体質を保持しているものの、二十世紀初頭以降の政治的環境には大きな変化がみられる。すなわち、清朝の崩壊によって拍車のかかった半植民地化、内戦状態を経ての共産党政権の成立、絶対的権力者であった毛沢東の死、そしてそれに伴う現代化路線の採用がある。こうした政治的環境の変化は、流行り謡採集の主体、意図、方法の違いとして反映されている。

流行り謡に託した民衆の本音の所在に関しては、主としてチャイナ・ウォッチャー諸氏の見解を集約することにより、遅々として進まない政治改革或いは鄧小平後の中国社会の行方を民衆がどのように捉えているか、探ってみる。言うまでもなく、流行り謡は現実の政治、経済、社会のありようを風刺

した民衆の「生の声」であり、謡の文句を一瞥しただけでも民衆の不平・不満の原因が手に取るように理解できる。本論では、さらに一步踏み込んで、流行り謡に託された民衆の不平・不満がどの程度のものであるか、すなわち開放政策に対する民衆の評価と真意がどこにあるのかを探ってみる。

本論におけるこうした試みを通じて、今を生きる中国の民衆にとって流行り謡がどのような意義をもつものであるか、解明することができよう。また、岡[1995]及び本研究は、現代中国社会に特徴的な様々な問題を民衆の目線と同じ高さで観察することにより、それらの諸問題に対する我々の認識を一層深めてくれよう。

2. 流行り謡の採集形態からみた時代的特徴

2. 1. 流行り謡の歴史的意義

春秋戦国時代に始まって清朝に至る中国の歴代王朝は、民意を汲み上げ、自らの政権の安定に供することを目的とし、流行り謡を制度的に採集してきた。民衆が政治に対する不満を公然と口にすることが不可能であった封建時代にあっては、誰が謡い始めたのか定かでない流行り謡という形式で、ご政道批判を行う以外にすべはなかった。

そして、社会の混乱期には流行り謡が「堰を切った水のように、広大な地域で無数の庶民の口から歌い出され」、その上、反乱を企む野心家の謡言も入り交じり、流行り謡はまさに「国家の治乱興亡をはかる晴雨計のようなもの」である（班璣[1996]p. 246）。

辛亥革命後の中国社会は、列強諸国による半植民地化、軍閥の割拠、国共内戦などの渦中にあり、近代民主主義国家からはほど遠い状況であった。中華人民共和国の成立についても、「最後の皇帝」毛沢東率いる共産党「王朝」

の誕生であるとし、言論の自由に象徴される民主主義の欠如した社会主義中国を封建王朝に擬する向きもある。例えば、高島俊男[1989]がそうである。矢吹晋[1991]は、毛沢東を「皇帝」に、周恩来を「宰相」になぞらえている。また、中国共産党をめぐる中国政治の客体的条件に関して、渡辺利夫・小島朋之[1994]は、次のように述べている。

中国共産党が温存した政治的な中国の特色とは、封建的専制主義であったといってよい。・・・中略・・・中国のなかの封建的専制主義の伝統という受け皿の存在があって初めて、共産党と毛沢東の独裁は可能になったのである。封建的専制主義の最大の特徴点の一つは皇帝への権力・権威の集中であるが、中国共産党はそれをも継承してきたといえる。ピラミッドの頂点にたつ毛沢東は「人民の救いの星」として個人崇拜され、無謬の存在として思想の解釈権を独占し、党中央の決定を覆す権限さえも賦与された。民衆もそれに疑問を抱かず、「紅太陽」の毛沢東を指導者としてそのまま受け入れたのである。これが可能になったのは、封建主義の尻尾をつけたまま、社会主義に入ったからである。(pp. 152-153)

従って、二千余年の長きに渡って、民衆の本音を伝えてきた流行り謡の意義は、その発生土壌たる社会体制が一貫して封建的であるという歴史的事実を踏まえれば、基本的には今日に至るまで変わっていない、と言えよう。

しかしながら、流行り謡採集の状況（その主体或いはその意図など）に着目してみると、清朝以前は概ね官による制度的な採集が行われ、以て民情を推し量り治世の具となしたのに対し、辛亥革命以降は次に示すように明白な違いが認められる。

- ①五・四運動期： 文学・民俗学研究の対象として採集された
- ②毛沢東政権下： 体制賛美の謡が大量に創作され採集された
- ③鄧小平政権下： 制限付き容認＝国内の新聞・雑誌等で散見されるようになった

ここでは、こうした相違点に着目し、開放政策下における流行り謡の今日的意義を明らかにしてみたい。

なお、清朝以前において、官による制度的な採集がなされた外、多くの文人が文学的興味から数多くの歌謡集を編んだが、それは、同時代の謡の採集を意図したものではなく、先秦以降の文献資料の中に散見される謡を拾い集めることであった。だが、明代に入ると、文献資料から収集した謡に加えて、自ら採集した謡を歌謡集に収録する文人も現れた⁽¹⁾。

2. 2. 五・四運動と流行り謡

辛亥革命の後、学生、知識人を中心とする思想運動が高まった。その旗手的役割を果たしたのが、陳独秀によって1915年に上海で創刊された雑誌『新青年』であった。『新青年』を柱とする啓蒙運動の高まりは、1919年の「五・四運動」へと発展した。陳独秀、胡適、錢玄同、劉復、周作人等を教授陣に迎えた北京大学は、この時期の新文化運動＝新文学運動の中心地となった。そして、こうした新文学運動の中から中国の民俗学が誕生し、民間歌謡の研究が行われるようになった。すなわち、1917年9月に北京大学教授に招かれた周作人は、翌1918年に「歌謡徵集処」を設置し、劉復、沈尹默とともに編集を担当、錢玄同、沈兼士が方言を検討し、収集された歌謡を『北京大学日刊』に掲載した。

しかし、『北京大学日刊』に掲載された歌謡は百四十八篇に過ぎなかった。直江広治[1968]によると、「当事者の熱意にもかかわらず、この企画がそれほど成功を収め得なかったのは、主として歌謡徵集の意義が、まだ一般に理解されていなかったことにもとづくものと思われる。特に各県下の学校或いは教育団体に訓令を出して、代わって搜集させるといった、いわば間接的採集の方法を多く取ったことは、完全な失敗であった。(p.245)」と、この試みに対する評価は非常に手厳しい。

注意を要する点は、収集された「歌謡」には、民謡、民歌、童謡といった民間歌謡のみならず、俚諺、諧謔詩、謎謎、伝説、民話、神話など、文学や民俗学の研究対象となりうる雑多な「民間口頭文芸作品」が含まれていることである。本論で取り扱う「流行り謡」＝風刺歌謡は、その一部を占める存在に過ぎない。

周作人は『北京大学日刊』による歌謡収集に先立ち、1911年秋に日本から帰国後、故郷の浙江省で視学や中学校教員などを勤めるかたわら、1914年に『紹興教育会月刊』に「歌謡募集のお知らせ」を掲載したが²⁾、十数篇が集まっただけで失敗に終わった（直江[1968]p. 245）。

民間歌謡の収集、研究が本格化したのは、1922年に北京大学に「歌謡研究室」が設けられ、周作人がその責任者となったときである。同年10月には『歌謡週刊』が創刊され、周作人、常恵が編集を、沈兼士、錢玄同が方言の検討を行なった。1925年6月の停刊までに97号が発行され、13,339篇の歌謡が収集され、その内2,226篇が採録された。

1925年の「五・三〇事件」以降の極度の社会的混乱の中で、歌謡研究は十年ほどの中断を余儀なくされた。1935年に至って、北京大学内に「歌謡研究会」が復活し、翌1936年には『歌謡週刊』が復刊されたが、胡適がその復刊の詞の中で述べているように、この度の歌謡収集の眼目は民俗学的研究ではなく文学的研究にあった。しかし、1937年の抗日戦争の開始とともに又もや『歌謡週刊』は停刊となり、歌謡研究は再び中断されることとなった。

この時期の流行り謡収集の特徴は、「五・四運動」に象徴される新文化運動の高まりの中で、進歩的知識人により文学・民俗学研究資料として収集され、関係雑誌等に採録された点にある。収集の中心的人物は、近代中国における民俗学の草分け的存在と目される周作人であった。

2. 3. 毛沢東と流行り謡

毛沢東は民心掌握の道具としての流行り謡の有用性を比較的早い時期から認識していた。特に、日本の敗戦に続く国共内戦時において、毛沢東率いる共産党は、国民党軍を悪し様にこきおろした謡或いは共産党・解放軍を賛美した謡を民衆の間に積極的に流行らせた。この点に関して、柿崎進[1974]は次のように記している。

直接的な反抗意志を表現した民謡が、共産党に指導されたものであったにしても、中国の歴史の中で、この時期ほどおびただしい数の歌が流布したことはなかった。(p. 180)

これからあげる歌の中にもまた⁽³⁾、多分に有目的な教育宣伝作家の筆になったもののあることは理解されるべきであると思う。(p. 187)

この項にあげる民謡の原本には⁽⁴⁾、一つ一つこれを作った農民労働者の姓名をあげ、その動機まで述べているが、これに対して文芸家あるいは知識人が、多少にかかわらずこれを添削し、さらにイデオロギーを表現させていることは明かであるが、このことによって農庶民たちの自然に吐露している素朴さに多少の修飾はあっても、彼らの共産党、八路軍に対する賛美、喜悅、信頼、歓迎の感情は少しもそのような結果にはなっていない。私どもは、この過渡期の民衆の声としての民謡を、指導者たちの意図を濾過して、農民労働者の心情を汲みとることができよう。(p. 199)

中華人民共和国成立後の毛沢東政権下では、体制を賛美する民歌・民謡が毛沢東の指示によって大量に作り出された。すなわち、1958年3月に毛沢東は成都会議において、大躍進運動推進の一環として大々的な民歌・民謡の創作と収集を提案した。これが、1958年から59年にかけて展開された「新民歌運動」である。民歌・民謡の収集は重大な政治的任務と理解され、全国の各

級党委員会は民間歌謡収集機関を設置し、熱狂的に新民歌・新民謡の創作と収集にあたった。上海だけでも半年間で労働者や農民が創作した民歌・民謡は百万篇に達した、と伝えられている（丸山昇ほか[1985]p.150）。また、当時全国で合計八万種類余りの民歌選集が編纂された、との報告もある（懷冰[1995]p.82）。1959年には、郭沫若と周揚がこれらの新民歌・新民謡から三百編を精選し編集した『紅旗歌謡』が出版された。収録された歌謡は、その内容に基づき、①共産党賛歌、②農業大躍進賛歌、③工業大躍進賛歌、④祖国防衛賛歌に分類される（姜彬[1992]p.1120）。

古代から「五・四運動」に至るまでの伝統的な民間歌謡収集は、すでに存在する謡を収集することであった。ところが、新民歌運動においては、毛沢東の意を受けた党幹部が民衆に対して民歌・民謡の創作を強要し、収集したのであった。これらの謡は全てが毛沢東や党や祖国を讃え、大躍進政策や人民公社化を賛美したものであり、党の政策や社会を批判したものは皆無であった。

文革時においても、文革や毛沢東を賛美した民間歌謡が御用文人の手によって、或いは党の意を汲んだ「革命的」な労働者、農民、兵士によって多数創り出された。例えば、文革末期に出版された中央民族学院（編）『少数民族詩歌選』には民歌八十三篇を含む二百十五篇の詩歌が収録されているが、そのうちの百五十四篇において「毛主席」或いは「毛沢東」という言葉が使用されており、毛沢東賛歌が目につく⁽⁵⁾。

もちろん、毛沢東政權下において、反体制的な流行り謡も自然発生的に流布したが、この時代にそうした謡が採集され、活字化されることは決してなかった。

2. 4. 鄧小平政権下の流行り謡

2. 4. 1. 許される批判 --- 社会現象としての役人の汚職・腐敗

鄧小平の時代となり、経済開放政策の進展とともに社会的矛盾が顕在化すると、空前の流行り謡ブームが湧き起こった。そして、最も注目すべき点は、これらの流行り謡が三三五五、国内で発行される各種の新聞や雑誌などで紹介されるようになったことである。社会現象としての党幹部・政府役人の腐敗ぶりが中国国内の新聞・雑誌に散見されるようになったことは驚きである。

台湾の中国大陸問題研究所の甘棠[1989]は、中国国内の新聞・雑誌に掲載された流行り謡を多数採録転載しているが、同書の党・政府にかかわる謡八十八篇を採録した部分(pp. 19-148)について、その採集方法をみると次の通りである。

- | | |
|-----------------|-----|
| ① 中国国内のマスコミから採集 | 48篇 |
| ② 中国国内の知人などから採集 | 26篇 |
| ③ 香港の新聞・雑誌から採集 | 14篇 |

情報源として利用された中国国内のマスコミは次の通りである⁽⁶⁾。

『人民日報』、『諷刺与幽默』、『山西日報』、『河南日報』、『文摘報』、『新民晚报』、『羊城晚报』、『中国青年報』、『南京日報』、『青海日報』、『文摘週刊』、以上が新聞。『瞭望』、『刺玫瑰』、『求是』、以上が雑誌。「中央人民廣播電台」、「山東人民廣播電台」、「甘肅人民廣播電台」、以上がラジオ放送局。その他に「新華社」、「内参選編」⁽⁷⁾。

情報源であるマスコミの中に、中国共産党の機関紙『人民日報』、中国共産党中央の理論誌『求是』⁽⁸⁾、国営ラジオ放送のキー局「中央人民廣播電台」、国営通信社「新華社」などがあることから、開放政策下において、社会や政治を風刺した流行り謡がかなりの程度容認されるようになったことがわかる。これは、毛沢東政権下では考えられないことであり、政治改革が遅々として進まない中で、言論の自由へ向けた大きな第一歩と評価できよう。

従って、1980年代後半に始まり現在に至る空前の流行り謡ブームを引き起こした要因は次の二つであると言えよう。

①貧富の格差や役人の腐敗などの社会的矛盾の拡大

②流行り謡のマスコミ報道解禁＝制限付き容認

この二つの要因の相乗効果によって流行り謡ブームが生じたのである。要因①によって鬱積した民衆の不満は、要因②の存在によってその不満を大幅に解消することが可能となったのである。現在の流行り謡ブームは、あたかも大量のせき止められた水が半分開かれた水門から勢いよくほとぼしり出ているような状況である。

もっとも、党・政府は「戯れ歌」に過ぎない流行り謡に対して寛容な態度をとることにより、民衆の政治的不満をやわらげることを期待しているのであって、決して言論の自由を認めようとしているわけではない。事実、流行り謡のマスコミ報道の容認は制限付きであり、党や社会主義路線を真っ向から否定し、攻撃するような謡は「反革命罪」に該当するとして、処罰の対象となる。ただし、流行り謡による党・政府批判がどこまでなら許され、どこから処罰の対象となるのか、その明確な線引きは不可能である。党内の権力闘争を反映して絶えず左右へ揺れ動く政治状況に加え、権力者のその時々気分によって可否の判断が下されるためである。「人治」主義の中国にあっては、権力者の一言が何にもまして優先することは周知の通りである。

共産党への入党を希望したある女性が、かつて政策を批判した流行り謡を口にしたことを指摘され、入党申請が却下された（明華[1996]p.47）。当該流行り謡がどのような内容であったのか不明だが、少なくとも処罰の対象となるような過激なものではなかったであろう。しかし、入党の審査に際して流行り謡を口にしたことが却下の理由となり得る、という点は興味深い。

2. 4. 2. 許されない批判 --- 党と社会主義

役人の腐敗や汚職を批判した程度の内容なら問題ないが、社会主義そのも

のに反対したり、共産党打倒を叫んだりするような流行り謡、標語、大字報（壁新聞）などは、「反革命罪」に該当するとして処罰の対象となる。

民衆の間で流布した反党、反社会主義の流行り謡は、時を経ずして国内に太い人脈のパイプを有する香港のマスコミに伝えられ、専ら当地の新聞・雑誌に掲載され、我々の眼にするところとなる。

羅冰[1989]は、1988年後半頃に発生した「反革命罪」事件の事例を幾つか取り上げている。すなわち、①『共産党がなかったら新中国はない』及び『団結こそ力』の替え歌を創った三人の青年が鄭州公安局に逮捕された。②西安では三件の反革命標語事件の犯人が逮捕されたが、その内の一人は党支部組織委員であった。③武漢市では反革命的な大字報を書いた二人の青年が逮捕された。

では、反革命罪に問われた替え歌、標語、大字報の内容を見てみよう。

① 替え歌：

『共産党がなかったら新中国はない』

共産党を倒さなきゃ中国は救われぬ、

共産党を倒さなきゃ中国は救われぬ。

共産党は悪事が多い、

共産党は民を害し国を誤らす。

政權奪って四十年、

毎日毎日階級闘争。

人民の生活が苦しくとも構わない、

国家の後進性も構わない。

民主と自由を奪い去り、

官僚の特権を大いに享受。

共産党を倒さなきゃ中国は救われぬ、

四つの基本原則を葬らなきゃ中国は救われぬ。

『団結こそ力』

団結こそ力、団結こそ力、この力は鉄、この力は鋼；

鉄よりも硬く、鋼よりも強い。

独裁政治に対して火ぶたを切って、

共産党特権階層を滅ぼそう。

民主に向かって、自由に向かって、

全中国に向かって何度も雄叫びをあげよう！

②標語：

共産党を打倒しよう！

官僚特権階層を打倒しよう！

③大字報：

今年は中共建国四十周年であり、鄧小平をトップとする中共上層集団は、このめでたい年をつつがなく過ごしたいと独りよがりに望んでいる。しかし、事実は全く逆で、中国人民は四十年の共産党の独裁統治を経て、その被害は大きく、改革の失敗や特権階層の腐敗は人民大衆をして次第に次のことを認識させている。つまり、中国は政治の民主を実現し、四つの基本原則を覆して初めて、真に民主的で、自由で、繁栄し、統一された新中国を建設することができるのだ。

党・政府批判がどこまで許されるのか、判断が難しい。例えば、1993年に発生した次の事件は、毛沢東による大躍進政策の失敗に起因する餓死者数を資料に基づき推定発表したところ、開放政策を推進する党中央の逆鱗に触れる結果となったというもの。すなわち、1958年の「大躍進政策」が原因で、農村部だけでも餓死者が四千万人余りに達した可能性がある、という内容の研究論文を発表した上海大学の金輝は処分を受け、彼の論文を掲載した雑誌『社会』の当該号は発売停止となり、出版社は「肅正」された（丁抒[1996] p. 103）。

1993年9月に、十四年半ぶりに仮釈放された「民主の壁」闘士の魏京生は、翌94年4月に再び公安当局に検挙され、1995年12月に北京市中級法院におい

て懲役十四年の刑が言い渡された。判決文では罪状として、「国外で反動的な文章を発表したこと」や「政府転覆の行動計画を画策したこと」や「国内外の非合法組織のメンバーと結託したこと」などが挙げられているが（伍義山[1996]p. 44），根拠に乏しい。上述の罪状は，例えば，鄧小平宛の意見書を弟の魏曉濤の経営する香港の会社を通して海外に公表したことなどを指している。

また，1993年には，取材活動中に21人の外国人ジャーナリストが公安当局に身柄を拘束されたことから（藤野彰[1994]p. 38），言論の自由，報道の自由は決して保障されてはいないことがわかる。

2. 4. 3. 民衆の不満と流行り謡

本論で「流行り謡」と称している政治や社会を風刺した謡は次のように呼ばれることもある。例えば，「民謡」（柿崎[1974]，班[1996]），「土謡」（藤沢由蔵[1942]），「民歌」（柿崎[1974]），「ざれ歌」（竹内実[1994]），「落首」（矢吹[1996]），「風刺歌謡」（班[1996]）。

いずれにせよ，流行り謡は政治や社会を風刺することによって，党・政府に対する民衆の批判，不満，怒りを表したものである。ただ，民衆の怒りが頂点に達した場合には，流行り謡という形式をとることなく，直接的な行動に出ることになる。例えば，農民の抑えきれない怒りは，農民暴動という形をとる。

陸農[1994]によると⁽⁹⁾，1993年に全国の農村では1,675,000件の事件が発生したが，その内の6,230件余りは農民暴動に発展した。その内，幾つかの県に跨り，かつ参加者が千人を超える大規模な農民集会・暴動だけでも78件にのぼった。暴動の激しかった地域では，県庁や郷役場が焼き討ちや略奪に遭い，警察や銀行なども襲撃を受けた。これらの暴動で県や郷の役人と農民に8,200人余りの死傷者を出し，二百億元近い経済的損失を出した。また，同年中に，県レベルの党機関や公安・司法機関への襲撃事件が560件余り発

生し、鎮圧に当たった公安、武装警察、解放軍に死者385人を含む2,400人余りの死傷者が出た、と報告されている。

都市部における大規模な反政府行動は、1989年6月4日の「天安門事件」に象徴される民主化運動であった。農民暴動にせよ、民主化運動にせよ、こうした具体的な反政府行動をとれば、間違いなく政府の弾圧を招くことになる。他方、開放政策の進展により「『墮落した社会主義』の素敵な味（矢吹[1996]p. 25）」を知ってしまった民衆は、社会的な不平等感を抱きつつも直接的な反政府行動に出ることはめったにない。そして、彼らのストレス解消策として流行り謡が存在するわけである。明[1996]は、杭州の友人が「お腹が一杯になると政府の悪口を言うのが私たちの“业余爱好”になっている(p. 46)」と語ったと記している。“业余爱好”とは「趣味」であり、食事の後には憂さ晴らしに政府批判の流行り謡を口にする「アマチュア愛好家」になっているわけだ。

さらに、1990年代に入ると、漫才の舞台においても流行り謡が取り上げられ、民衆は笑いのうちに大いに溜飲を下げるできるようになった。例えば、筆者の手元にある全維潤・王振華の演ずる漫才「ロックン・ロールの流行り謡」（カセット・テープ）は全編流行り謡のオンパレードで、しかもその中の幾つかの流行り謡にはロック調の曲をつけて面白おかしく歌っている⁽¹⁰⁾。

余談ながら、江蘇省沛県の県委員会書記兼政法委員会書記として着任した李開文が、司法関係者の腐敗ぶりを揶揄した流行り謡に触発され、当該部門の肅正・正常化に大奮闘したことを紹介した次のルポ・ルタージュは、流行り謡の有用性の一例を示している。

“大盖帽两头翘，吃了原告吃被告”（裁判官の帽子は前と後ろがピンと跳ね、原告のあとは被告を食い物に）という民衆の中で流行っている言い回しが絶えず李開文の耳元にまわりついていて、彼は一カ月余りの時間をかけて全県の行政・司法部門の大小の機関を走り回り、

百名を超える幹部や民衆と話し合いの場を持ち、行政・司法部門の中に規律の緩み、権力を利用した私利の画策、ルーズな法の執行、法の執行に伴う違法行為などの問題が確かに存在しており、行政・司法関係者の肅正が不可避であることを了解した。（蘇民義・任一丁[1994] p. 52）

“大盖帽”は一応「裁判官」と訳したが、警察官の制帽に似た帽子を着用している者を指し、司法関係者全般を象徴している。

2. 4. 4. 文聯による流行り謡採集の失敗

懐[1995]によると、1995年5月に中国文聯の主催で「百名の文芸家による全国各地での流行り謡採集」活動が展開された。これは同年3月の中国作家協会第四期主席団第九回会議での、高占祥・文化部常務副部長兼中国文聯党組書記の提言を受けたものである。そして、同年7月に北京で開催された流行り謡採集体験座談会には、北京在住で採集に参加した70名余りを含む150名余りの文芸家が出席した。

ところが、座談会における発言は次のような内容に終始し、具体的にどのような流行り謡を採集した、という声は全く聞かれなかった。

①高占祥（文聯党組書記）：「流行り謡採集の過程において、採集にあたった者は皆、改革開放及び四つの現代化の熱気に満ちた生活と典型的人物に魅了され、励まされ、多くの文芸創作の素材を採集し、創作意欲をかきたてられた。」②李瑛（詩人）：「改革開放は延安地区に大きな変化をもたらしており、皆は大いに奮い立った。」③李琦（画家）：「上海浦東地区へ採集に訪れた人たちは大いに見聞を広め、時代の脈拍を感じた。」④万国権（全国政協副主席）：「この度の全国各地での流行り謡採集は、時代を反映し民心を鼓舞する文芸作品を生み出し、精神文明建設を促進することに対して、大きな効果を発揮するであろう。」彼らの発言は、いずれも採集されたはずの流行り謡については一言も触れていない。これは、当初の意図とは裏腹に、

開放政策や共産党を賛美した流行り謡を採集することができなかったためである。(懐[1995]pp. 82-83)

この事実一つをとってみても、開放政策下の流行り謡を取り巻く政治的、社会的環境が、①清朝以前の封建時代、②五・四運動期或いは③毛沢東政権下とは明らかに異なることがわかる。すなわち、体制賛歌的な内容の謡のみを選別収集しようとした点で①②と異なり、かつ民衆の間で自然発生的に創出された謡を収集しようとした点で③と異なる。さすがに毛沢東時代のように、民衆に体制賛美の謡の創作を強要したり、採集に当たった文芸家がそうした内容の謡を捏造したりすることはなかった。その結果、「流行り謡採集」はかけ声倒れとなってしまう、「創作素材収集」に変じてしまった。反右派闘争以来、幾たびもの舌禍・筆禍事件に遭ってきた文芸家たちが保身に走るのもやむを得ない。彼らの政治的立場は民衆のそれに比べて微妙であり、たとえ役人の腐敗を風刺した程度の流行り謡であっても、それらを自分の手で採集し、発表することが危険な行動であることを敏感に感じとっている。

2. 5. 「伝承」される“民歌”と「伝播」される“民謡”

2. 5. 1. “民歌”と“民謡”

いわゆる民間歌謡とは、“民歌”と“民謡”に大別される。前者は日本語の民謡に相当するものであり、後者は政治や社会を風刺した謡で、本論では流行り謡と呼んでいる。“民歌”は民衆の生活、風俗習慣などを反映したものであり、何世代にも渡って伝承される性質のものである。これに対して、“民謡”は政治や社会を風刺したものであり、特定の時代の比較的短い期間に特定の地域内に伝播される性質を有する。すなわち、“民歌”は時代を越えてタテに「伝承」されるもの、“民謡”は同一時代をヨコに「伝播」されるものである。

常恵は1922年の『歌謡週刊』の創刊号に発表した論文の中で、各地から送

付された「竹の簾を隔てて彼女を見る」という主題の“民歌”に十以上の謡い方（歌詞）が存在する点に着目し、比較研究の意義を唱えたが、その後、胡適や董作賓も同様な指摘をした（直江[1968]pp. 249-250）。ある“民歌”が何世代にも渡って歌い継がれていく中で、周辺各地へ伝播され、さらにそれらの地で伝承されていき、多くのヴァリエーションをもつ結果となったわけである。これらの歌詞の違いを比較研究することによって、伝播の系譜や方言の差異を明らかにする試みがなされたのであった。

民俗学が「民間伝承」を取り扱う学問である点を踏まえれば、同一時期にヨコに「伝播」される“民謡”は“民歌”に比べて民俗学的意義が相対的に小さいと言える。開放政策下の“新民謡”の相当部分が新聞、雑誌、ラジオなどのマスコミを通じて、全国各地へ一斉に伝播されている。くちコミの場合にも、比較的短期間で伝播されるように見受けられる。「十億の人民の一億が・・・」或いは「マージャン打てば三、四日は眠らず・・・」といった謡のように、十種類以上の異なったヴァージョンを有するものも存在するが、ほとんどの場合、これらのヴァージョンには、地域的特性を示す方言は使用されてはいない。また、謡の題材には拝金主義の風潮や役人の腐敗など、中国全土に普遍的な社会現象を扱ったものが大半を占め、最初にどの地域で流行り始めたのか特定できないことも多い。こうした事実から、開放政策下の流行り謡について、各々の謡の系譜を辿ることは、困難な上にそれほど意味のあることではない、と言えよう。

2. 5. 2. “民謡”と伝播 --- 補論

“民謡”，すなわち「流行り謡」は決して伝承されるべき性質のものではないが、時として古い“民謡”と類似のものが出現することがある。それは、班[1996]の指摘の通り、古代以来の既存の歌謡集などに採録された“民謡”を下敷きにして創り出された“新民謡”である。そのほかに、俚謡を變形して作り出された謡や、唐詩などをもじった諧謔詩が存在する。岡[1995]に収

録した“新民謡”でみると、次のような例が挙げられる。

例 1 :

【旧】 奉使来时,	お偉いさんがやって来りゃ
惊天动地;	上へ下への大騒ぎ
奉使去时,	お偉いさんが去ったあと
乌天黑地;	暗黒政治が続くのみ
官吏都欢天喜地,	役人は皆ホクホク顔
百姓却啼天苦地.	民の嘆きは地に満ちる

(賈克非[1987], 原載: 陶宗儀『輟耕録』)

【新】 検査団未来之前惊天动地,	検査団がやって来る前は大騒ぎ
来了之后花天酒地,	来たら飲めや歌えのドンチャン騒ぎ
走了之后威信扫地.	帰った後は威信が地に落ちる

(趙金銘[1989])

「奉使」とは、元代に皇帝の命を受けて各地を巡視した「宣撫使」や「肅正政廉訪使」などの高級官僚を指し、この謡は彼らの横暴ぶりを揶揄している。他方、開放政策下の「検査団」の行動パターンは元代の「奉使」となんなら変わるところがなく、新旧二つの謡は形式のみならず、内容においても類似性を際立たせており、流行り謡が生み出される社会的土壌が今日に至るまで基本的に変わっていないことを示している。

例 2 :

【旧】 衙门口, 朝南开,	役所の門は南向き
要打官司拿钱来!	訴えあるなら銭持って来い

(柿崎進[1974])

【新】 ①衙门口, 朝南开,	役所の門は南向き
有理没理拿钱来,	理があろうとなかろうとカネ持って来い
有理无钱莫进来.	理があってもカネのない奴はお断り

(楊知著[1993])

②校门口，朝钱开， 校門はカネに向かって開いている
有才无财莫进来。 才能あってもカネない奴はお断り

（楊知著[1993]）

元の謡は1920年代に流行ったものである。開放政策下の謡は、拜金主義の風潮が役所のみならず、学校教育の分野にまで及んでいる事実を伝えてくれる。

例 3 :

【旧】七億人民六億侃， 七億の人民の六億が論争
只有一亿在生产。 一億だけが働いている

（王曙光[1994]）

【新】十億人民九億商， 十億の人民の九億が商売
还有一亿待开张。 その上一億は開店準備中

（楊知著[1993]）

元の謡は1960年代末期の文革時に流行ったもので、生産に従事することなく、政治論争に明け暮れていた当時の世相を彷彿させる。当時の人口は七億であった。他方、開放政策下の謡は、ネコもシャクシも金儲けに走っている風潮を巧みに表現している。なお、文革時に流行ったこの種の謡が活字化されることはなかったが、民衆の記憶の中に残っていた謡が現代風につくり変えられ再現されたのであろう。

次に俚諺に手を加えて創り出された流行り謡の例を挙げておこう。

例 4 :

【諺】 有钱能使鬼推磨。 地獄の沙汰も金次第
【謡】 有钱能使官推磨。 役所の沙汰も金次第

（楊知著[1993]）

俚諺の“鬼”を“官”に変えただけで、役人の腐敗ぶりを巧みに表現している。

例 5 :

【諺】 有理走遍天下， 道理があれば天下御免

無理寸歩難行。 道理がなければ動きがとれぬ
【謡】 有礼走遍天下, お礼をすれば世の中どこでも大通り
无礼寸歩難行。 お礼をしなきゃにっちもさっちも行かぬ
(茂森[1995])

“理”と“礼”は同音である。

例6:

【諺】 三个臭皮匠, 三人寄れば
赛过诸葛亮, 文殊の智慧
【謡】 三个诸葛亮, 三人の諸葛亮よりも
不如一个臭皮匠。 一人の靴職人の方がまし
(樹建・左愚[1994])

三対一の比率を逆にすることにより、俚諺の意味を「三人の頭脳労働者の収入は一人の肉体労働者の収入に及ばない」という内容に変え、知識人の嘆きを表している。紙面の関係で諧謔詩の例は省略する⁽¹¹⁾。

通常、個々の流行り謡の寿命は数カ月から数年程度である。特に、何らかの歴史的事件や出来事を題材とした謡は、タイムリーであることがその謡の値打ちであり、とりわけ寿命が短い。例えば、次のような謡の場合がそうである。

例7:

你五十八, 我八十五。 あんた五十八, わしゃ八十五
(申田久治[1990])

1989年5月に旧ソ連のゴルバチョフ書記長(当時58歳)が初めて中国を公式訪問したが、民衆はその折、ゴルバチョフの若さと高齢にもかかわらず引退しない鄧小平(当時85歳)を対比し、皮肉った。

例8:

中央忙组阁, 中央は組閣で忙しい
省里忙出国, 省は海外旅行で忙しい

地县忙吃喝, 地区や県は飲み食いで忙しい
 乡镇忙賭博. 郷や鎮は賭博で忙しい

(明華[1988])

胡耀邦が失脚した1987年1月から同年秋の中国共産党第十三回全国代表大会にかけて流行った謡であり、短期間のうちに幾つものヴァージョンが生まれた。

開放経済下の流行り謡の中で、最も息長く謡われているのは「十等公民」と題する流行り謡である。晩君[1994]によると、この謡は1970年代末から80年代初めにかけて、「十等人」として東北地方の農村で謡われ始めた。その内容は、党支部書記、村長、会計係といった村の顔役などを題材とした素朴なものであったが、1980年代半ば以降、役人を筆頭として、開放政策の中でうま味のある職業となった自営業者、外科医、新聞記者、俳優などを織り込んだヴァージョンが次々に創り出された。秦儒海[1996]によると、最近では「十五等人」にヴァージョン・アップした謡も登場している(p. 40)。「十等公民」は、流行り謡としては非常に息長く謡われているが、その歴史は二十年にも満たない。民俗学で言うところの「伝承」の概念は、少なくとも三世代以上に渡って受け継がれることを指しており、現在に至るまでの「十等公民」のタイム・スパンは「伝播」の範疇にとどまるものである。

3. 政治改革の行方と流行り謡

3. 1. 経済改革が政治に与える影響

前章では、党或いは社会主義を脅かす内容の言動が、依然として反革命罪で処罰されることを述べた。しかしながら他方では、経済改革・開放の進展が政治に影響を及ぼしていることも事実である。『朝日新聞』（1996年5月

31日付)が香港情報として報じたところによると、中国は1980年に施行された現行刑法から反革命罪の条文を廃止することを検討しており、早ければ来春の全国人民代表大会に改正案が示されるという⁽¹²⁾。これは政治改革の視点からすれば確かに大きな朗報であるが、現在中国のおかれている困難な状況を視野に入れて判断すれば、大幅な政治改革の早急な実現は望み薄であろう。この点に関して、矢吹[1996]は次のように指摘している。

当面は経済発展に必要な限りにおいて管理体制を改革する。つまり「行政改革は行う」が、政治の「民主化、多元化は先送り」する戦略だ。ではいつまで先送りするのか。経済発展が「小康を得た水準」に達するまで、そして九年間の義務教育が普及し、識字率を高め、普通選挙が現実的に可能になるまでである。

ここではまず経済改革、次いで時間をかけて政治改革へという二段階戦略が明確に意識されている。(p. 24)

それでは、国民の生活水準が「小康」水準に達し、九年間の義務教育が普及するのは、果たして何年後のことであろうか。1979年に鄧小平(当時副首相)が訪中した大平首相に対して「西暦二千年に中国は“小康”を得ることができだろう」と語ったが、1980年代以降の経済成長をみれば二十一世紀初頭には「小康」水準に達するであろうと予想される。

一方、小学校六年及び中学校三年の計九年間の義務教育を盛り込んだ「義務教育法」が公布されたのは1986年のことである。1993年には「中国教育改革・発展要綱」が出され、西暦二千年までに全国の人口の85%を占める地域で九年制の義務教育を普及させることが目標として掲げられているが、二億人弱の成人の非識字者が存在することを考え併せれば、普通選挙に至る道は険しい。

また、胡鞍鋼[1995]の指摘の通り、「これまでの歴史が示してきたように、中国では経済が安定すれば社会は安定し、政治が安定した(p. 18)」わけであり、経済面における安定は欠くことができない。従って、少なくとも今後十

年程度は現在同様に経済優先の政策がとられると考えるのが妥当であろう。

中国共産党は、1995年9月28日開催の第十四期中央委員会第五回全体会議において、『第九次五カ年計画（1996～2000年）及び2010年に至る長期計画目標に関する提案』を採択した。その折、今後の十五年で大いに力を入れて解決すべき重大問題として七点が挙げられたが、その中には、農業基盤の脆弱さ、国有企業改革の遅れ、インフレ問題、地域間格差、腐敗の蔓延など、「流行り謡」のテーマと重なり合う諸問題が含まれている。第八次五カ年計画終了年である1995年時点で存在するこうした重大問題を、中国政府は今後十五年をかけて解決していく考えを示している。

1995年のGDPは5.77兆円で、実質成長率は10.2%と、世界平均の2.9%を大きく上回る高い成長率を示し、また、同年の最大の政策課題であったインフレ抑制に関しても、小売り物価上昇率は14.8%と、政府目標の15%を下回った。15%という数値の妥当性はともかくとして、また、インフレ問題以外にもいくつかの重大問題を内包しつつも、経済改革は現時点で一応の成果をあげていると評価できよう。

3. 2. 鄧小平後の中国社会

鄧小平後の中国に関する中国研究者の意見は、大きな混乱はなく経済成長が継続すると予想する楽観論と社会が大きく混乱し経済は停滞すると予想する悲観論にはっきりと分かれている。楽観論の旗手は矢吹晋・横浜市立大学教授であり、悲観論の旗手は中嶋嶺雄・東京外国語大学教授である。

中嶋[1995b]は、深刻化する農村の荒廃、それによってもたらされる食糧危機、或いは台湾、香港問題、或いはチベット、新疆ウイグル自治区に見られるような民族問題などの様々な危機が存在するため、「今世紀末、つまり九九年の建国五〇周年ごろに、中華人民共和国の共産党体制そのものが崩壊していく可能性さえ秘めている(p.9)」としている。

しかしながら、岡[1995]で指摘した通り、共産党に対する民衆の不満は確かに大きい。共産党が急激に無力化した場合には、旧ソ連や東欧諸国の轍を踏み、国民経済或いは国家そのものが存亡の危機に直面する可能性がある。民衆はソ連崩壊後のロシア経済の惨状について見聞きするにつけ、そうした最悪の事態だけは回避したいという思いを強く抱いている。また、共産党による一党支配がそれほど長くは続かないことを敏感に嗅ぎとっている。

朱建栄[1995]は、「経済改革がまだ道半ばの今の中国においては、局地的な混乱が生じて不思議ではない(p. 21)」とした上で、「中流意識の急増（都市住民の八割が中流意識を持っているとのアンケート調査がある）に伴って、開放路線の継続、混乱の回避を望むというのが国民の総意になっていると言える(p. 21)」と断言している。すなわち、国民の中流意識が鄧小平後の混乱を收拾する力として働く、との見方である。

高井深司[1996]は、経済の変化は必ず政治の変化をもたらすとした上で、次のように述べている。

長期的に見た場合、やはり、中国も政治面では、それなりに変化の途上にあるといえよう。それは、上からの一元支配の弊害の改善という面でも見られるし、天安門事件のように、着実に市民の間に、民主化への意識が芽生えているという面でも見られる。中国共産党もいずれこうした変化を何らかの形で吸収していかざるを得ないだろう。(p. 18)

また、高井[1996]は、ゴルバチョフ元ソ連大統領及びペリー米国防長官の言を引いて、自説を補完している。すなわち、1995年11月来日したゴルバチョフ元大統領は、中国の政治改革の可能性について次のように語った。

経済の急速な変化は必ず政治面でも変化をもたらす。彼らも秘密の会議で、政治改革を話し合っている。ロシアの場合、いかなる経過をたどって、政治改革がゴルバチョフの手からはなれていったのか、彼らも真剣に研究している。経済だけ自由化して、政治は今の体制を維持

しようとしても難しいことを自覚している。ただ、安定を保ちながらその改革を中国的なやり方でやろうとしている。（高井[1996]pp. 18-19）

1995年10月のクリントン・江沢民会談の後、ペリー国防長官はアメリカの包括的な中国政策を次のように語った。

長い目で見れば、中国も変化しつつある。例えば、中国当局は人権を侵害しているものの、市場改革の進展によって、政府に対する圧力が強化され、最終的には基本的人権を守ろうとする市民の力を強める法令が急速に整備される方向に動いている。（高井[1996]p. 19）

また、渡辺利夫氏は改革の成功と共産党の自然消滅を予測し、次のように述べている。

私は、多くの中国ウォッチャーの非常に慎重で控えめな見方とは対象的に、中国の改革・開放路線はやがて成功するものと信じている。そして中国共産党は、この改革・開放の成功の過程で必然的に生まれてくるであろう政治的民主化・自由化要求とどこかで「おりあい」をみつけつつ、やがて自ら「死滅」に向かうであろうとも信じている。

（渡辺・小島[1994]p. 346）

いずれの見解も、長期的に見れば中国の政治は民主化の道を歩むとしているが、すでに紹介した矢吹[1996]の見解及び中国政府の2010年長期目標要綱の内容などから判断すれば、民主化には今後十年から二十年程度の時間を要すると解釈できよう。

3. 3. 流行り謡の行方

すでに述べたように、1980年代末からの空前の流行り謡ブームの原因は、社会的矛盾の拡大に対する民衆の不満の鬱積と流行り謡のマスコミ報道解禁である。制限付きにせよ、流行り謡が中国国内の新聞・雑誌に掲載されるよ

うになったことは、毛沢東政権下の時代と比較して考えた場合、民主化への大きな第一歩と言えよう。

他方、党・政府批判、いわゆる言論の自由は依然として制限されており、こうした中途半端な社会状況が大量の流行り謡を生み出す温床となっているのは事実である。上述したように、十年から二十年程度の過渡期を経た後、政治改革が断行され、民主主義が実現された場合、流行り謡はどうなっていくのであろうか。

中国の流行り謡に相当するのがロシアのアネクドート（小話）であるが、名越健郎[1996]によると、権力への嘲笑と抵抗の手段だったアネクドートはゴルバチョフ政権のグラスノスチ（情報公開）を契機に市民権を得、1980年代末以降、劇場で漫談として演じられたり、活字化され小冊子となったりした。こうした現象には、中国の現状とそれほどの違いはない。ところが、名越[1996]は、「不条理な現実が続く限り、語り継がれるだろう(p.9)」としながらも、「現在のロシアは、アネクドートが養分とする閉鎖社会が失われたことで、アネクドートの世界も、存亡の危機に直面している(p.8)」と述べている。

ポーランド経済研究者の田口雅弘氏によると、社会主義ポーランドにおいては政治や社会を風刺した小話や替え歌が国中に蔓延していたが、1989年の民主化を契機にピタリと収まったそうである。

中国の流行り謡も、言論の自由が保障された時点で、それらを生み出す土壌が失われ、旧社会主義諸国の小話同様にそれ自身の存在価値も失われるであろう。しかし、言論の自由を得たにせよ、社会的諸矛盾が消滅しない限り、細々ながらでも流行り謡が生き残る可能性は大いにある。例えば、現代日本に上司と部下の関係などを皮肉った「サラリーマン川柳」の類が静かなブームとして存在するように。文字の国である中国の場合、遊び心も一段と発達しており、流行り謡が完全に消滅してしまうとは考えにくい。ただ、これまでのように、流行り謡が政治権力にまで影響を及ぼす存在ではなくなるこ

は確かである。

4. まとめ

本論では、流行り謡を取り巻く政治的、社会的環境の変化について述べた。党や社会主義そのものを罵倒する内容でない限り、国内のマスコミに登場することが容認された点が開放政策下の流行り謡の大きな特徴である。腐敗現象の蔓延という流行り謡発生のための社会的土壌が熟したことに加え、当局による流行り謡の容認が引き金となって未曾有の流行り謡ブームが生じた。

開放政策により資本主義的な享楽を目の当たりにし、多少なりともその恩恵にあずかった民衆は、拡大していく社会的不平等や役人の腐敗に対して不満を抱きつつも、直接的な反政府行動に出ることを避け、流行り謡を口にすることによって自らのストレスを解消している。

急激な民主化が実行された旧ソ連や東欧の惨状を教訓として、民衆は共産党の急速な無力化によって極度の社会的混乱が生じることを懸念している一方、経済の発展は必然的に政治の民主化をもたらすはずで、時間をかけた政治改革が実行されるであろう、との予感を抱いている。

言うまでもなく、流行り謡は本来、文学或いは民俗学といった人文科学の研究素材である。しかも、流行り謡は低俗な「戯れ歌」に過ぎないため、唐詩などと比較してその文学的価値は遥かに低く、また、民間伝承される神話、民話、諺、民謡（＝“民歌”）などに比較してその民俗学的価値が劣るものであることは否めない。流行り謡が単一の学問領域の研究素材としての魅力に乏しいという事実は、流行り謡に関する研究には学際的アプローチが要求されることを示唆している。

岡[1995]では、収集した六百篇余りの流行り謡を整理・分類し、人文科学的な解釈を施すとともに、社会科学的な考察を加えることにより、開放政策

下の中国社会に内在する諸問題の解明を試みた。もとより、「口頭文芸作品」である流行り謡は社会科学の研究对象とは成り難いものであり、この試みに一定の限界が存在することは当初より明かであった。それにもかかわらず、敢えて社会科学的手法を取り入れた理由は、流行り謡が時の権力に対する民衆の本音を表したものであり、流行り謡にはそれらが生み出された背景にある政治や経済が大きくかかわっているからである。

現実の政治・経済を反映した流行り謡は民衆の「生の声」であり、その集大成こそ民衆サイドから見た現代中国社会の実相を示すものである。

【注】

- (1)例えば、班[1996]によると、先秦から明嘉靖年間までの民間歌謡（主として“民歌”）を収録した楊慎(1488-1559)の『古今風謡』、或いは先秦から明末までの民間歌謡（主として“民謡”）と諺を収録した杜文瀾(1815-1881)の『古謡諺』が有名だが、特に後者の評価が高い。
- (2)直江[1968]では『紹興教育会月刊』であるが、張菊香・張鉄榮[1986]では『紹興県教育会月刊』となっている。
- (3)当該書の第二章第一部(pp. 164-184)及び第二章第二部(pp. 185-198)に採録された45篇の謡を指す。
- (4)当該書の第二章第三部(pp. 199-213)に採録された20篇の謡を指す。
- (5)毛沢東賛美は民歌の題名に端的に示されている。すなわち、「毛主席の著作は清らかな泉だ」（回族）、「毛主席の恩は海よりも深い」（維吾爾族）、「毛主席の革命路線を最も愛す」（苗族）、「永遠に毛主席に従っていこう」（彝族）、「毛主席が幸せをもたらしてくれた」（壮族）、「毛主席の声は最もよく響き渡る」（瑤族）、「毛主席の恩は永遠に心に記される」（哈尼族）、「毛主席の恩」（納西族）、「毛主席の英明な指導に全面的にすがろう」（景頗族）、「毛主席の著作を真面目に読もう」

（土族），「心は毛主席に向いている」（撒拉族），「毛主席を歌う」（烏孜別克族），「紅い心は永遠に毛主席に向いている」（崩龍族），「金色の大きな道 毛主席」（裕固族），「毛主席に従って前進しよう」（独龍族）。

(6)収集時期は1986年11月から1989年2月。

(7)高級幹部向けの非公開情報紙『内部参考』の特集版。

(8)半月刊。党理論誌『紅旗』廃刊に伴い、1988年7月に創刊された。

(9)数値は、1994年6月2日に中国共産党中央の社会治安綜合治理委員会が公表した報告書『目下の農村社会の不安定要素と治安問題』からの引用。

(10)元のタイトルは“摇滚顺口溜”で遼寧文化藝術音像出版社から出版、発売年は不明。この他に、筆者の手元には姜文芸・白晶共演の漫才カセット・テープ“社会热门顺口溜”（黒龍江音像出版社）がある。

(11)李白の『蜀道難』を模した諧謔詩を岡[1995]pp. 254-257で取り上げている。

(12)1996年5月30日付の香港紙『星島日報』が全人代の法律制度担当者の話として報じたもの。

【付記】

本論は、1996年7月にディスカッション・ペーパーとして発表した小論に加筆、修正したものである。

【参考文献】

班瑋[1996]「中国風刺歌謡研究序説 --- 岡益己著『現代中国と流行り謡』に寄せて」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第2号，pp. 243-253.

丁抒[1996]「大飢荒一省死人八百万 --- 從四川看大躍進人禍」『九十年代』1996年4月号，pp. 100-103.（香港）

- 藤野彰[1994]『嘆きの中国報道 -- 改革・開放を問う』亜紀書房
- 藤沢由蔵[1942]『黄土の声』華北交通社員会（北京）
- 甘棠[1989]『中国大陸の順口溜（続集）』中国大陸叢書36（台北）
- 平山和彦[1989]「民俗学的発想」鳥越皓之（編）『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社，pp. 4-23.
- 胡鞍鋼[1995]（村山義久・訳）「政治が過熱させる中国経済の危うい構造」『世界週報』1995年11月7日号，pp. 18-23.
- 懷冰[1995]「評大陸文壇採風活動」『争鳴』1995年10月号，pp. 82-83.（香港）
- 賈克非（編）[1987]『中国歴代歌謡精選』北岳文芸出版社（山西省）
- 姜彬（主編）[1992]『中国民間文学大辞典』上海文芸出版社（上海）
- 柿崎進[1974]『中国の民歌』現代企画室
- 菊池道樹[1996]「経済：概観」『中国年鑑(1996)』新評論，pp. 123-124.
- 串田久治[1990]『天安門落書』講談社
- 陸農[1994]「農村不穩情況惡化」『争鳴』1994年8月号，pp. 28-29.（香港）
- 羅冰[1989]「中南海向左大傾斜」『争鳴』1989年2月号，pp. 6-8.（香港）
- 茂森[1995]「貪汚腐敗妙法奇觀」『九十年代』1995年4月号，pp. 34-37.（香港）
- 松本俊郎[1995]「鄧小平以後についての樂觀論と悲觀論」（講演レジュメ・未公刊）
- 丸山昇・伊藤虎丸・新村徹（編）『中国現代文学事典』東京堂出版
- 明華[1988]「民謡什錦小拚盤」『九十年代』1988年8月号，p. 63.（香港）
- [1996]「春遊帰来話民情」『九十年代』1996年5月号，pp. 46-47.（香港）
- 三菱総合研究所（編）[1996]『中国情報ハンドブック(1996年版)』蒼蒼社
- 中嶋嶺雄[1995a]『中国経済が危ない』東洋経済新報社
- [1995b]「軍事ボナパルティズムに傾斜する江沢民体制」『世界週報』1995年11月7日号，pp. 6-9.

- 直江広治[1968]『中国の民俗学』民俗民芸双書13, 岩崎美術社・
- 名越健郎[1996]『独裁者たちへ!!---ひとレジスタンス459』講談社
- 岡益巳[1995]『現代中国と流行り謡』御茶の水書房
- 秦儒海[1996]『世紀末民謡聯唱』『争鳴』1996年2月号, pp. 35-40.
- 樹建・左愚[1994]『当代顺口溜与社会热点掃描』中国档案出版社(北京).
- 蘇民義・任一丁[1994]「他始終都在現場」『半月談』1994年第2期, pp. 51-53. (北京)
- 高井潔司[1996]『中国情報の読み方』蒼蒼社
- 高島俊男[1989]『中国の大盗賊』講談社
- 竹内実[1994]『新編・中国を読むキーワード』蒼蒼社
- 上原一慶[1996]「経済:政策と理論」『中国年鑑(1996)』新評論, pp. 125-128.
- 晚君[1994]「従民謡看民心民情民意民怨」『争鳴』1994年8月号, pp. 78-79. (香港)
- 王曙光[1994]『熱点中国』NTT出版
- 渡辺利夫・小島朋之[1994]『毛沢東と鄧小平』NTT出版
- 伍義山[1996]「中国人的不幸和悲哀」『九十年代』1996年1月号, pp. 44-45. (香港)
- 矢吹晋[1991]『毛沢東と周恩来』講談社
- [1995]『鄧小平なき中国経済』蒼蒼社
- [1996]「加速する脱社会主義革命」『RONZA』1996年5月号, pp. 20-25.
- 楊知著[1993]「毛沢東南巡搞文革, 鄧小平南巡搞搶劫」『九十年代』1993年11月号, pp. 21-23. (香港)
- 張菊香・張鉄栄(編)[1986]『周作人研究資料(上)』中国現代作家作品研究資料叢書, 天津人民出版社(天津)
- 朱建栄[1995]「中国の行方は「後鄧」と「鄧後」に分けて見よ」『世界週報』

1995年5月23日号, pp. 20-21.

趙金銘[1989]「中国当代俗語所展現的社会文化意義」『大阪外国語大学論集』

第1号, pp. 85-93.

中央民族学院(編)[1975]『少数民族詩歌選』人民文学出版社(北京)

Features of Chinese Popular Jingles or MIN-YAO under the Open Policy

Masumi Oka

Popular jingles or MIN-YAO had been strictly prohibited under the Mao regime, and they came to be set free when the modernization policy started as far as they do not deny the communist regime itself. The lifting of prohibition together with the expansion of social inequalities under the open policy brought an unprecedented boom of popular jingles in the latter half of 1980's, and the boom still continues.

Oka [1995] tried to indicate the various social problems in today's China through the analysis of over six hundred popular jingles. In this study, I have presented more sufficient references about the following two points: ① the differences between the political circumstances under which popular jingles have been produced, and ② the true feelings of the people behind popular jingles toward the open policy and the post Deng Xiaoping. The first point is examined by comparing how and why jingles were compiled among the eras of the New Literature Movement, Mao Zedong and Deng Xiaoping. The second point is made clear by studying the various viewpoints of China watchers.